

海運九条の会ニュース

発行：海運九条の会事務局

和光市本町31-4-102

048-465-5505

iuehara@pep.ne.jp

あけましておめでとうございます。
本年もよろしく願いいたします。

「九条の会」第2回全国交流集会に参加して

昨年11月24日、東京神田の日本教育会館で、「九条の会」の第2回全国交流集会が開かれました。全国47都道府県のすべての地域からの参加で、この日までに6801の地域・職場・分野の「九条の会」が結成されたと報告されました。

午前中の全体会で、奥平康弘さんは、「九条の会」の役割について、「自衛隊には反対しないが改憲には反対」というように、反対の根拠はいろいろなニュアンスがあるが、結論は重なるオーバーラップ・コンセンサスを糾合することが大切であると述べました。

また、加藤周一さんは、安部政権を崩壊に追い込んだ「九条の会」の運動の中心は、「九条を守る」ことでしたが、これからの運動は「九条を生かしていく」方向での長丁場の運動にしなければならないと指摘すると同時に、改憲勢力の解釈改憲政策に対して、それに相互に関連する日常生活のあらゆる問題を通じて考える必要性を強調されました。

澤地久枝さんは、「私たち一人ひとりの市民の力で安部内閣を替えた。私たちは一人ではない。憲法九条

で世の中をよくしようという人たちがいっぱいいるということに希望を持って生きていきたいと思います」と訴えました。

鶴見俊輔さんは、80年間続けて反戦感情は私の中に生きている。「九の会」がもっともっと長く続けば戦争をなくすことをやれるかもしれないと。

会場を間違えて遅れて入場した大江健三郎さん。経緯を説明すると会場から和やかな励ましの拍手。個性的で普遍的なこのような集まりが今後も続くことに希望をかけていると結びました。

「九条の会」からの訴え

1. 「九条の会」アピールへの賛同の輪を創意をこらして広げ、9条改憲反対、9条生かそうの圧倒的世論をつくろう。
2. 職場・地域・学園の草の根で、日本国憲法9条のすぐれた内容と改憲案の危険な内容についての理解を深めるための大小無数の集会を開こう。
3. 当面、「すべての小学校区に九条の会」を合言葉に、文字どおり思想・信条・社会的立場の違いをこえた「会」をつくろう。地域・分野の「会」のネットワークをつくり、交流・協力しあって運動を前進させよう。

2007年11月24日

「九条の会」第2回全国交流集会

映画「日本の青空」観賞に40名集う

昨年12月5日、九段会館ホールで催された千代田上映委員会による鑑賞会に、当会員も参加しました。観賞後の感想を寄せていただきましたので、紹介します。

映画「日本の青空」— 問われる日本・世界への認識

日本国憲法誕生の経緯については、断片的には見聞きしていたが、この映画のように系統的にしかも平易にまとめられたものは始めてであり、大変勉強になった。

現行憲法は「占領軍に押

し付けられたもの、日本国民の自主的な憲法でない」との論もあるが、日本の先進的な学者が、諸外国の憲法や明治の自由民権憲法案の研究の上に作成した「憲法研究会」案が基となって出来上がったことは否定できない事実であり、戦後60年間日本国民に受け入れられ、日本を比較的平和・民主的に発展させてきた基

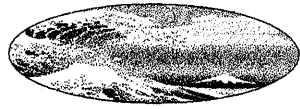
軸であることも否定しようもないであろう。

現憲法制定当時、真の民主主義や平和を解せず頑迷に反抗した勢力があったようだが、現今の改憲論者に通ずるものを感じさせられた。

日本・世界の現状と将来への正しい認識が問われているのではないだろうか。

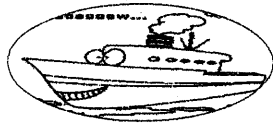
(S・K)

しばらくぶりに感動しました。全体として戦後の新憲法制定の過程が丁寧に描かれていたと思います。幣原首相がマッカーサーに戦争放棄条項(9条)を示唆していたことなどはもう少し詳しく時間をとったほうが、もっとわかりやすくなったのではないかと思います。(K.U)



NHKの特集を見たり、憲法がGHQの押し付けで出来たものではないことは判っていました。鈴木安蔵も知ってはいたが、「日本の青空」を見て、志を貫いて憲法を作る柱になった人だったことがよく分かった。映画の中の二人の若者も「勉強しなくて」と変化していったり、奥さんも苦労されたことがよく伝わってきた。また松本丞治があれば

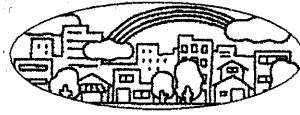
ど強行に国体を護ろうとした人だとは知らなかった。アメリカの押し付け憲法でなく、日本国民が戦争の痛みから、二度と戦争はしたくないとの実感をベースに作られたという事を、若者にも伝えていきたい。(石川総子)



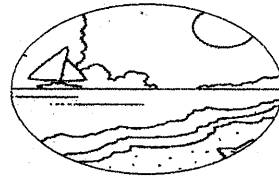
私は、知らない事ばかりで大変参考になりました。大澤監督の舞台挨拶にも並々ならぬ意欲が感じられ、多くの方がこの映画を観て、私たちの現在を考える契機にして欲しいと思いました。

女性解放の主題は、本当にこの憲法とともに始まったということが実感されました。戦後いろいろな法律が出来ましたが、男女同権の道、いまだ半ばならずの感を禁じえません。現代に生きる私たちは、

現憲法が名実ともに実行されるように望むばかりです。(H.E)



映画「日本の青空」を見て、ある時は曇り空になるかと案じた事もありましたが、本当にこの青空が永久に続きます事を祈らずには居られませんでした。強い夫婦の絆、その信念に強く心を打たれました。(日比野濱子)



とにかく、私たちの知らない事が、多くて、大変勉強になりました。いつも憲法などあってないような、空気や水のようなものとしか感じていませんでしたが、多くの犠牲の上にできた私たちの憲法は、60

年以上も経て、いよいよ大切なものである事が、分かりました。

どう見たって、「自衛隊は軍隊だよ」という人がいます。果たしてそうでしょうか。

軍事力から見れば、自衛隊は、世界有数の武力集団ですが、軍隊とはいえない決定的な制約があると思います。それは、憲法9条によって、交戦権が認められないという制約です。

歴代自民党政府が、自衛隊の海外派兵をなし崩し的に実現してきましたが、いずれも「戦闘地域でないところでの後方支援」と言わなければならないことにも明瞭です。「日本が攻撃されてもいないのに、武力行使をしてはならない」と国民は時々の政府に対し、憲法9条を守ることを要求し続けてきました。いまこそ立憲主義を生かすときだと思います。

(小林)

新憲法制定時の総理大臣の発言あれこれ

幣原喜重郎 (1946. 3. 20 枢密院非公式会合発言)

「戦争放棄は正義に基づく大道で、日本はこの大旗を掲げて国際社会の原野をひとり進むのである。――他日新たな兵器の威力によって、短時間のうちに交戦国の大小都市ことごとく灰燼に帰する惨状を見ることになれば、諸国は初めて目覚め、戦争の放棄を真剣に考えるだろう。そのころ、私は墓場に眠っているだろうが、墓石の陰から後ろを振り返り、諸国がこの大道につき従ってくる姿を眺めて喜びとしたい。」

吉田茂 (1946. 6. 26 憲法国会答弁)

「戦争放棄に関する本案の規定は、直接には自衛権を否定してはおりませぬが、第九条第二項において一切の軍備と国の交戦権を認めない結果、自衛権の発動としての戦争も、また交戦権も放棄したものであります。――我が国においてはいかなる名義をもってしても交戦権はまず第一、自ら進んで放棄する、放棄することによって全世界の平和確立の基礎をなす、全世界の平和愛好国の先頭に立って、世界の平和確立に貢献する決意を、まずこの憲法において表明したいと思うのであります。」